

目 次

まえがき	2
第1章 日本軍は中国で何をしたのか？ 鬼だった兵士たち	3
皇国教育／謀略から全面戦争へ／シベリア抑留／『蟻の兵隊』／ 戦場での加害体験／731・細菌戦部隊／平頂山事件／実的刺突／ 阿片謀略／強姦／虐待・虐殺・拷問／三光作戦／生体解剖／ 糧秣は現地調達／方正地区日本人公墓	
第2章 ソ連シベリアから 中国・撫順戦犯管理所へ	9
国境の駅「綏芬河」／撫順戦犯管理所	
第3章 管理所での人道的待遇	10
人道と寛恕／管理所職員の苦悩／戦犯の心境の変化／人としての処遇／ 自死した戦犯／認罪と坦白／戦犯名簿の公開／「鬼から人へ」	
第4章 特別軍事法廷（1956年 瀋陽・太原）	14
特別軍事法廷／周恩来の指示／帰国まで	
第5章 「中国帰還者連絡会」結成と活動	16
舞鶴方針／中国帰還者連絡会結成／『三光』出版／ 中国人殉難者遺骨返還事業と劉連仁／中帰連分裂／中帰連再統一／ 「向抗日殉難烈士謝罪碑」の建立／季刊『中帰連』発行	
第6章 「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」「NPO中帰連平和記念館」発足	19
中帰連解散／「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」発足／ 『赦しの花』撫順の朝顔／国内謝罪碑建立／ 「NPO中帰連平和記念館」の設立／平和記念館の活動／ 「再生の大地合唱団」の立ち上げ	
あとがき	23
資料	24
中帰連年表	24
中帰連関連書籍	26
映像資料、謝罪碑など	27

まえがき

人が人であるかぎり人殺しはできません。親が丹精こめて身につけさせた人間性を剥ぎ取ることが初年兵教育の目的であり、その仕上げの訓練が「刺突」でした。農民や捕虜を生きながら柱にくくりつけて、交替で「刺突」させるのです。映画にもなった「日本鬼子（リーベン・クイズ）」（監督：松井稔）はこうして誕生し、中国全土を荒らしました。

敗戦後、シベリア抑留から、中国撫順戦犯管理所に移管された人びとは、鬼のままであり、暴れました。しかし人道的配慮のもとに、暖かい日差しと十分な時間の中で、戦争中、自分が何をしたかを考えはじめ、死刑を覚悟して、鬼の所業を「供述書」として書いたのです。

1956年、瀋陽（撫順）・太原の軍事裁判で起訴されたのは45名であり、撫順と太原に収容されていた1017名は「起訴免除」「即日釈放」され、帰国を赦されたのです。

起訴された者も最長20年の禁固刑でしたが、1945年に捕らえられた日から、シベリア抑留の5年、戦犯管理所の6年の11年が刑期に参入され、ほとんどが刑期満了前の1964年4月までに帰国しています。

帰国翌年の1957年、彼らは「中国帰還者連絡会（中帰連）」を結成し「反戦平和」「日中友好」の旗の下に、戦時下の加害証言と、撫順・太原における「人道と寛恕」の待遇の中で人間性を取り戻した体験を語り続けてきたのです。

高齢のため、事務所の維持もむずかしくなり2002年4月に解散。翌日から若者たちが立ち上げた「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」と元「中帰連」は一緒に走り出しました。撫順戦犯管理所は翡翠の二頭立ての馬を贈って祝してくださいました。

2006年11月にはNPO中帰連平和記念館を開館し、戦争加害を語り伝える活動を続けています。2010年、再生の大地合唱団も立上がり「反戦平和」と「日中友好」のために闘い続けた「中帰連」の活動を讃えています。

仁木ふみ子・初代理事長のことば

第1章 日本軍は中国で何をしたのか？ 鬼だった兵士たち

皇国教育

戦時中、日本では「国家は皇国、軍隊は皇軍、国民は臣民」とされ、国家に属するものは全て天皇のものであり、天皇は神とされ絶対的な存在でした。ひとたび天皇の接頭語に「恐れ多くも」の言葉がつけば、直ちに直立不動の姿勢を取られました。軍人は軍人勅諭を暗記させられ「上官の命令は直ちに朕（天皇）が命令」とされ、また戦陣訓で「生きて虜囚（りょしゅう）の辱（はずかしめ）を受けず」と、捕虜にならずに自決せよと教えられ、このため多くの犠牲を強いられました。学校でも小さな時から教育勅語により徹底的に洗脳され、天皇・皇后の写真と教育勅語を入れた「奉安殿（ほうあんでん）」が各学校に設置され、その前を通る時には最敬礼を強制される社会でした。



【奉安殿】

謀略から全面戦争へ

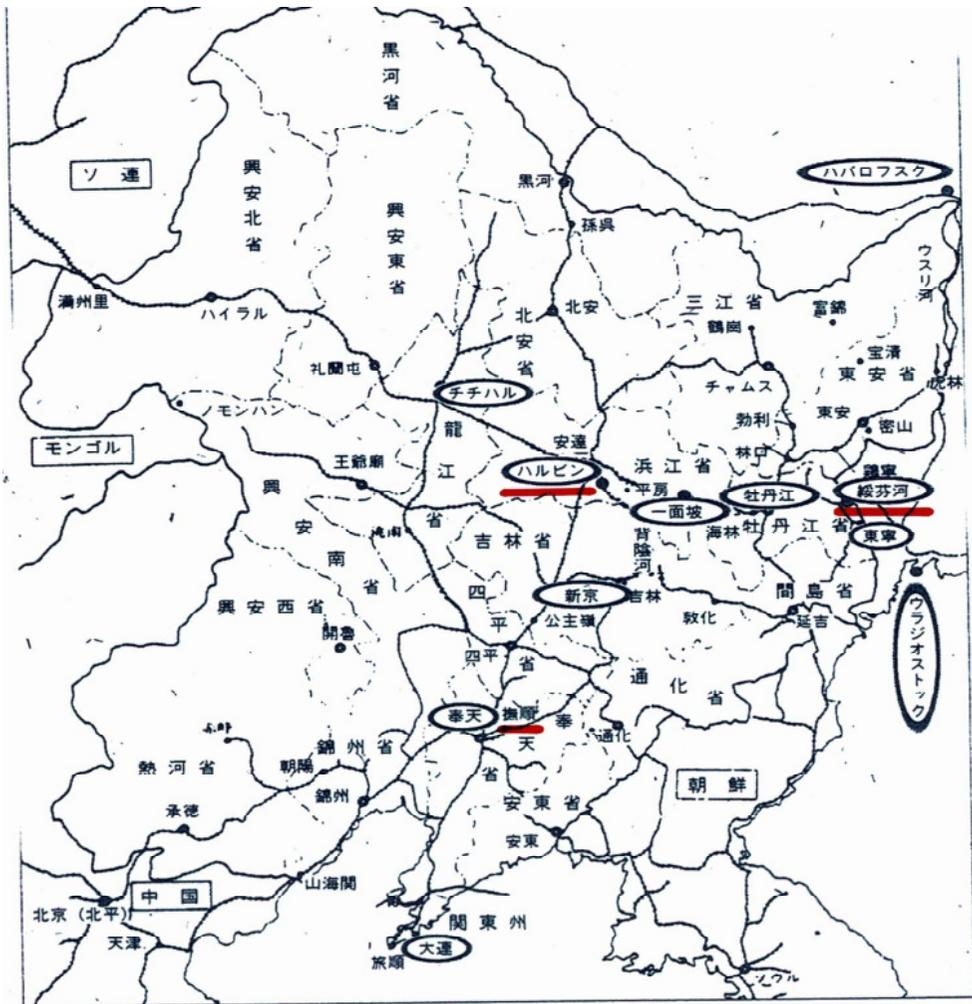
1928年6月4日、日本軍の出先機関であり満州の実権を握っていた関東軍参謀・河本大作らの陰謀により張作霖が乗る列車爆破「満洲某重大事件」（奉天事件・皇姑屯事件）を起こし、1931年9月18日には関東軍の自作自演の謀略による満鉄爆破の「満州事変」（柳条湖事件）を起こしました。当時は極秘扱いで「関東軍の謀略」であることを国民は知らされず、いずれも真実は戦後になって判明しました。

1932年日本は傀儡の偽「満州国」を作りました。しかし、その偽「満州国」の成立は国際連盟から認められず、1933年3月国際連盟を正式に脱退し、日本は世界から孤立しました。1937年7月7日には「盧溝橋事件」を起し、本格的日中戦争が勃発しました。これら一連の戦争は1931年9月18日の満州事変から1945年8月15日の敗戦までの「日中15年戦争」とも言われます。

日本は、中国侵略により国際社会から鉱物資源や石油の輸入を止められました。泥沼の日中戦争打開のため日本は東南アジアへ戦争を拡大し、遂に1941年12月8日マレー半島上陸・真珠湾攻撃でアジア太平洋戦争に突入しました。

シベリア抑留

1945年8月15日の日本敗戦後、ソ連軍によって満州からシベリアへ60万人が抑留され、寒さや栄養失調などで約6万人が犠牲になったと言われています。「中国帰還者連絡会（以下、中帰連）」会員の多くはこの60万人の中にいました。一番



1943年「満州国」地図

辛かった労働は酷寒の中の森林伐採で、比較的良かったのは寒さから逃れられる炭坑労働だったと聞きました。

彼らはシベリアに5年間抑留された後、中華人民共和国（以下、中国）成立翌年の1950年に、「戦犯」としてソ連から新中国へ引き渡され、撫順戦犯管理所に收容された969人の戦犯たちです。

『蟻の兵隊』

また山西省では、敗戦後も日本軍の一部上層部（支那派遣軍総司令官岡村寧次が関与したと言われている）の命令により、日本軍将兵が蒋介石軍とつながりが深い閻錫山軍に協力させられ、組織的に残留しました。この「日本軍」として八路軍と戦った人（結果として中国の内戦に介入した）なども含んだ140人が太原

戦犯管理所に収容されてい
ました。彼らは映画『蟻の
兵隊』でも描かれた通り、
当時、日本の上層部からの
命令だったにもかかわらず、
戦後になって、「勝手に自分
たちで中国に残った（逃亡
兵扱い）」とされ、軍人恩給
も支給されませんでした。

この二カ所の戦犯管理所
に収容された人たちが帰国
した翌年の1957年に立ち上
げた組織が、中帰連です。
中帰連の会員の多くは59師
団と39師団に所属していま
した。



【第二次世界大戦「犠牲者数」】

【「東京新聞」2006. 8. 15(厚生労働省資料など)】

戦場での加害体験

では、中帰連の皆さんはどんな戦場体験をしたのでしょうか？ 中国で多くの虐殺にかかわったのは、中帰連だけではありません。同じ部隊や同じ地域にいた日本軍兵士たちはほぼ同じ戦場体験をしている筈です。日本軍は中国で約1000万人ともいわれる女、子供を含む住民たちを殺害し、また傷つけたのです。しかし、ほとんどの元日本軍兵士は「上官の命令による（仕方がない）」と口をつぐんでいたのです。

731・細菌戦部隊

日本で知られている戦争加害では、南京大虐殺のほか、731部隊が3000人以上の中国人をマルタ（丸太）と称して1本2本と数え、人体実験したことが際立っていました。

731部隊は1945年8月9日ソ連が参戦すると、証拠隠滅のため建物を破壊し、収容されていた約400人のマルタを毒ガスで殺し、焼却した遺骨をハルピンを流れる松花江に遺棄しました。ボイラー室と本部事務棟だけが残り、マルタは全員殺され、生き証人は一人もいません。部隊員と家族約1500人は、満鉄の特別列車で朝鮮半島を下り、8月末には日本の仙崎港などに帰りました。



【「731部隊「ボイラー室」跡】

731部隊の石井四郎や部隊幹部は、研究成果を米国に提供し、それと引き換えに米国から戦犯免責されました。朝鮮戦争直後、内藤良一や北野政次は「日本ブラッドバンク」を立ち上げ、731部隊が発明した「乾燥血漿」を米軍に売り、大儲けをしました。その後社名を「ミドリ十字」に変え米国から非加熱血液製剤を購入して、エイズウィルス感染者2000名を生み出しました。戦後731部隊の医者たちは医学界の重要なポストを占め、製薬会社に就職したり、開業医に復職したり、自衛隊ができるとう入隊するものもいました。

731部隊の「少年隊員」だった篠塚良雄は、帰国後長い間、証言活動を続けてきました。1998年6月に篠塚はアメリカ、カナダの「証言の旅、アジアのホロコーストを問う」の一行として参加しました。しかし、米シカゴ空港で入国拒否され、弁護士の要請も無視され、シカゴ空港から日本へ「強制送還」されました。石井四郎を免責して細菌戦の情報などを入手したアメリカは、アメリカ国内で篠塚に不都合な証言をして欲しくなかったのでしょう。

平頂山事件

満州事変後すぐの1932年9月16日、露天掘りで有名な撫順炭鉱近くの平頂山村では1932年9月16日、約3000人もの住民が関東軍に虐殺されています（平頂山事件）。抗日組織の炭坑襲撃を日本軍に伝えなかったと激怒し、翌日「写真を撮る」との口実で住民を一カ所に集めました。

しかし、三脚の黒い布を取るとそこにはカメラではなく機関銃が据え付けてあり一斉に火を吹き、阿鼻叫喚の場になりました。さらに生き残った人たちは銃剣で刺し殺されたのです。

その後、軍は脇の崖をダイナマイトで爆破し遺体を埋めたのです。この事件では死体の下で生き残った数人の証人がいました。

戦後、中国政府が遺骨の一部を掘り起こし、「平頂山惨案遺址記念館」として保存し公開しています。このほかに日本軍や日本企業による人捨て場を「万人坑（まんにんこう）」と言い、中国各地にあり、その遺骨は膨大な数にのぼります。



【平頂山惨案遺址記念館】

実的刺突

日本軍が、戦闘以外でも多くの女、子供を含む住民を拷問、殺害・虐殺していたことは、戦犯管理所で中帰連メンバーが書いた「自筆供述書」にも詳細があります。中帰連の中には南京大虐殺に参加したメンバーもいました。戦時中に日本国内では藁人形を突き刺す訓練をさせていましたが、戦地では初年兵訓練の仕上げや度胸試しに、農民・捕虜などの中国人を杭に縛り付け、集団で銃剣で突き殺

す「実的刺突」を実行しました。

南京大虐殺の際の百人斬り競争も有名ですが、中国人を試し切りや度胸試しなどの名目で斬首（ざんしゅ）し、生首を吊るしたり、手に持ち得意な顔で撮った写真なども残されています。

阿片謀略

中帰連会員の証言の中には、古海忠之や西尾克己が「アヘン」の生産販売にも関与した貴重な記録が含まれています。興亜院という日本の首相がトップとなる役所で、「満州国」における「ケシ栽培」と中国での「阿片販売」に関与した恐るべき事実が語られているのです。日本の阿片謀略による中国人犠牲者は1000万人を下らないと考えている学者もいます。

強姦

鈴木良雄は「戦場での強姦は命令ではなく、何と批難されても仕方ない」と悔悟しています。金子安次は2000年の従軍「慰安婦」問題を裁いた国際民法法廷の「女性国際戦犯法廷」で、鈴木良雄と共に性暴力の加害証言をしました。しかし、NHKがこの「加害証言」と「天皇有罪」の部分を政治家の圧力のもとにカットして報道し、大きな問題になりました。

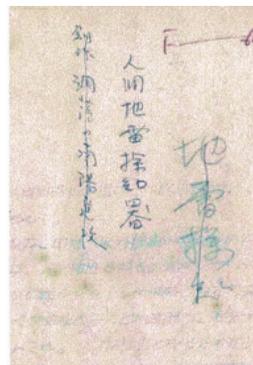
鈴木は「侵攻して行くところどこにも娘子軍（少女の団体）を連れていた。こんなことは、おそらく世界のどこの国でもなかっただろうと思える。娘子軍は、紛れもなく従軍慰安婦だった。娘たちは軍服を着せられ軍と一緒に行動させられた。部隊が彼女たちを連れ歩く目的はただひとつ」と言い遺しています。また金子は「慰安所は金がかかるが強姦ならタダだった」とも言っていました。強姦・輪姦は日常茶飯事であり、それは「慰安所」だけではなく、街中で公然と行われました。

虐待・虐殺・拷問

中帰連40年史の『帰ってきた戦犯たちの後半生』（新風書房、1996年）には「母親の前で娘を強姦した」、「中国女性をなぶり殺し腹を割き切り刻んだ」などの記載があります。

「人間地雷探知機」と称し、日本軍の行軍の先頭に中国人捕虜や農民を歩かせ犠牲にすることで、日本軍を守ったという記述もあります。戦闘員だけではなく、女性や子供、赤ちゃんまで殺したという証言映像が残されています。

その映像の中で中帰連メンバーは「赤ん坊まで殺さなくてはならなかったのかな〜」と後悔しています。しかし、



【日本人戦犯が記した「手記」】

当時はそれが名誉であり軍人の誇りでした。

日本軍は多くの中国人民を疑心暗鬼から八路軍とみて拷問を行いました。拷問でよく使われたのが「水攻め」でした。手足を縛って寝かせ、顔に布をかぶせ、その顔にやかんの水を注ぐのです。息を吸うたびに腹に水がたまり、腹が膨れると、足で腹を踏みつけ水を吐かせ、さらに注ぐのです。

特に中国では、戦闘員以外の農民・住民の犠牲が多く、ある中帰連会員は「中国人は人間と置いていなかった」と、虫けらのように扱ったことを証言しています。チチハルで13年間憲兵をしていた土屋芳雄は1917人を検挙、拷問、投獄し、嚴重処分の名のもとに裁判にもかけず直接間接に328人を殺したと証言しています（『聞き書き ある憲兵の記録』朝日新聞社）。

三光作戦

「三光（さんこう）作戦」という言葉や本がありますが、これは「焼き尽くし、殺し尽くし 奪い尽くす」という日本軍の行動を、中国側が表現した言葉です。

日本軍では「尽滅（じんめつ）作戦」と呼び、同じ内容を意味します。日本人の戦争犠牲者310万人という数字が使われますが、中国人の犠牲者は少なくみても1000万人、アジアの犠牲者は2000万人とも言われます。その人たちの多くは罪のない人たちでした。「誰が、いつ、どこで」始めた戦争なのでしょうか。

生体解剖

山西省（さんせいしょう）潞安（ろあん）陸軍病院で軍医をしていた湯浅謙は、当時、自ら中国人の生体解剖に参加していたことを証言し続けました。戦後、管理所収容時代にその被害者の母親から告発され、検事からその告発書を見せられています。それでも湯浅は起訴免除とされました。湯浅は「生体解剖は731（部隊がやった）だけではなく、（内科医を戦地で通用する外科医にするために）どこの野戦病院でもやっていたでしょう」と語り、慰安所には「将校専用慰安所」が在ったことも証言していました。

糧秣は現地調達

日本軍が来ると何をされるか分からず、命さえ危険なので中国人集落はもぬけの空となりました。補給が間に合わない日本軍は「現地調達」の名の下に食糧、馬の工サ、衣服、燃料……何でも掠奪し、家財は焚き火の薪にし、部落全てを放火し焼却しました。

その燃える家の中で犠牲になった中国人たちもいました。その阿鼻叫喚の声が忘れられないという人もいました。また、綿花などの掠奪収集は財閥系商社への協力活動であったことも証言していました。

方正地区日本人公墓

ハルビン東方180キロの方正（ほうまさ）という場所に「方正地区日本人公墓」があります。ソ満国境付近に留め置かれた開拓団は8月9日のソ連参戦で、関東軍が逃げ出したとは知らず、「ハルビンに行けば関東軍がいる」と信じてハルビンを目指しました。しかし、この方正まで辿り着きながら発疹チブスや寒さ、栄養失調などで約5000人が犠牲になり、当時仮埋葬されました。戦後、その白骨の山が露出しているのを見た残留婦人の松田ちるが、地元政府に「埋葬させて欲しい」と願い出しました。

その話が中央の周恩来総理（以下、周恩来）にまで届き、「解りました。それは中国政府がやらせてもらいます」と応じました。日本人開拓団犠牲者のために中国政府が建立してくれたのが「方正地区日本人公墓」です。その隣には集団自決で知られる「麻山地区日本人公墓」と、残留孤児が建てた「中国養父母公墓」が並び、周囲は柵で囲まれ「中日友好園林」とされきれいに整備されています。



【方正地区日本人公墓】

第2章 ソ連シベリアから 中国・撫順戦犯管理所へ 国境の駅「綏芬河」

日中戦争に勝利した中国では内戦状態が続きましたが、1949年に独立し世界から注目されているなかで、ソ連から中国への戦犯移管はスターリンからの提案でした。「ダモイ」（帰国）と騙されて貨車に乗せられた969人の日本人捕虜は、途中から進路を西に走る列車に、「おかしい？」と気づきました。

シベリア各地から送られた日本人は 1950年7月18日、中ソ国境の「綏芬河」（すいぶんが）で中国側に引き渡されました。ソ連内の移動は上下三段に仕切った貨車でしたが、中国側では白いカバーの掛かった客車が待っていました。

日本語の巧みな呉浩然（ごこうぜん）指導員と看護婦さんが「体調の悪い人はいませんか？」と車内を回り、温かい食事も用意されました。まだ「大東亜共栄圏」を信じ、「俺たちは中国に良いことをしたからだ」と勘違いしている人たちもいました。

彼らに乗せた列車は3日かって7月21日早朝「撫順城駅」に着きました。この移送は中国人民に知られ暴動が起きることを心配し極秘で行われました。駅から管理所まで数キロを徒歩で移動し、その警備にあたった八路軍はなぜか戦犯の両側に立って、銃を隊列の外側に向けて護衛していました。それは人民から戦犯への暴行を警戒し防ぐためであったことを、彼らは後日知ることになります。

撫順戦犯管理所

管理所に着くと彼らは17、18人ずつ部屋に入れられ施錠されました。シベリアでは鍵を掛けられたことはなく隊内は自由に交流できたので、鍵を掛けられたことはショックでした。しかし、彼らが最初に一番反発したのは部屋に貼ってあった「監房規則」でした。何故なら、その末尾には「東北撫順戦犯管制処」と記してあったからです。彼らは「捕虜であって、戦犯ではない」と猛反発しました。

59師団長だった藤田茂・元中将（後の「中帰連」初代会長）は、自らの過去を棚に上げ「国際法違反だ」と猛反発しました。管理所は「分りました」と監【撫順戦犯管理所「玄関」】房規則を撤去しましたが、戦犯であることに変わりはありませんでした。この撫順戦犯管理所はもともと日本が抗日捕虜などを収容するために1936年に建てた「撫順監獄」でしたが、逆に自分たちが入ることになりました。溥儀（元偽「満州国」皇帝）もここに一緒に収容されていました。

1950年6月に始まった朝鮮戦争の影響が懸念されたことから、佐官級以上はハルビン監獄へ、それ以外はハルビン北20キロの呼蘭（こらん）監獄に一時移送されました。その時に「処刑される！」と思った戦犯たちもいました。

一方で彼らは「日本が勝てなかった米国に中国が勝てる訳はなく、米軍が解放してくれる」と中国の勝利を想像もしていませんでした。しかし、38度線まで押し戻し停戦になったことを知ると、彼らは中国への見方が変わったと言っていました。下級兵士は1951年に撫順戦犯管理所に戻り、佐官級以上は停戦後に戻されました。



第3章 管理所での人道的待遇

人道と寛恕

周恩来指導のもと、管理所職員には「一人も逃亡させてはならない。一人も死亡させてはならない。戦犯と言えども人間であり日本人の習慣を守り、人権を尊重し殴打も罵倒も許さない」との指示が徹底されました。周恩来が日本へ留学し日本語などを教わった静岡県掛川市出身の松本亀次郎との出会いがなかったら、このような歴史にはならなかったかもしれません。

管理所はシベリアとは違い一切の強制労働も強制学習もありませんでした。彼らはやることもなく無為な時間を過ごしていました。日々反抗を繰り返し、中国人が食べているコウリャン飯を「こんなもの食えるか」と捨ててしまい、「俺たちは白米をたべるのだ」と威張っていました。管理所は上級と相談し彼らに三度三度白米に肉魚など、中国人家族分の食料を戦犯一人ひとりに与えていました。

それどころかお替わり自由で、「足りなければ炊いてきます」とまで言われます。正月には餅、雑煮などの特別食も出されました。当時、中国はまだ貧しく中国人はコウリャン飯を1日2食しか食べられない時代でした。シベリアのラーゲリの酷寒と飢えの中での強制労働と比べると、まさに天国と地獄の差でした。

管理所職員の苦悩

一方で管理所職員には日本軍に家族や親戚を虐殺された職員も少なくありませんでした。副所長夫人の于瑞華（うずいか）は家族が7人殺され、自分一人だけ生き残りました。彼女は日本軍に長年の恨みがあり、管理所への異動を「復讐のチャンス」と思っていました。また経理係の黄国城（おうこくじょう）は、「お前らは晩秋のイナゴさ。残された命は後わずかだ」と思っていました。炊事班の金興詩（きんこうし）は自分たちより遙かに豪華な戦犯たちの食事に反感をち、洗わない野菜や研がない米を炊いたり、食器桶を足蹴で運んだりしていました。

また医師の温久達（おんきゅうたつ）は 戦犯の待遇に納得がいかず嫌気がさし、何度も転勤願いを出しましたが受け入れられませんでした。日本人戦犯を直接指導したのは、日本語に堪能だった金源（きんげん）、呉浩然（ごこうぜん）、崔仁傑（さいじんけつ）の朝鮮族出身の中国共産党員でした。

朝鮮族であるが故に、日本の植民地支配のもと、日本語を学ばされていたからです。管理所職員は思想学習を繰り返し、日本人戦犯の改造教育の意義を学びました。

戦犯の心境の変化

戦犯たちは自分の過去は自分が一番良く知っており、この豊かな食事を前にして「最後の晩餐か？」と心配しました。また、焼却炉の煙突が立てば、今度は「あそこで焼かれるのか？」と内心、疑心暗鬼でした。しかし、指導員や管理所職員の人道的扱いは何時までも変わることはありませんでした。

戦犯はその有り余る時間のなかで、余った白米に齒磨き粉や油煙を混ぜ白黒の碁石を作り囲碁をしたり、将棋をしたり、反省どころか遊び放題でした。職員は面白くなく、白米の上にふけを落とした「ふけ飯」を食べさせたりもしました。それを知った周恩来は、「制裁や復讐では憎しみの連鎖は断ち切れない。20年後にはこの仕事の意味・重要性が解る」と職員を諭し、再教育しました。

また彼らは管理所から支給されたタバコに火を着けるのに、軍服の金属ボタンに紐を通した「ブンブン」を作って回し、鉄棒にぶ



【学習や娯楽の様子】

つけて火花を出し、布団の綿を引出し、その綿に火花で着火させタバコを吸っていました。職員は「火がないのに？」と不思議に思い聞きつけると、怒ることなく「タバコが吸いたければ火を付けてあげるから言いなさい」と諭しました。

戦犯の扱いはソ連とは雲泥の差であったことは、綏芬河で貨車から客車に乗り換えたことでも解ります。日本軍国主義が造ったこの監獄には暖房がありませんでしたが、彼らの入所に合わせて改造され暖房も設置されていました。

人としての処遇

では、戦犯らはどのようにして反省・認罪していったのでしょうか？

それは、強制労働も強制学習もない、あり余る時間の中で進んでいきました。

零下30℃での強制労働と空腹で余裕のないシベリアでは考えられないことでした。十分な食事と規則正しい生活を保証され、筆記用具や新聞・書籍が提供され、考える時間を与えられたのです。

一週間に1回の入浴と、月に1回の散髪。健康診断も実施され虫歯の治療や眼鏡も作ってもらいました。ある戦犯は梅毒で歩行も困難の状況でしたが、当時まだ高価で入手困難だったペニシリンを連日打ってもらい全快したことを感謝していました。働かず豊かな食事を食べる毎日に、「体がなまってしまふ」と瓦生産も始めましたが、これも希望者だけでした。



【戦犯たちの健康管理】

自死した戦犯

しかし、そんな中で管理所内で自死した戦犯が二人いました。一人は便槽に飛び込み、もう一人はトイレ掃除のクレゾールを飲んだのです。処刑の恐怖に耐えられなかったのでしょうか。

便槽に飛び込んだ戦犯を職員の赫純昌（かくじゅんしょう）が便槽から引上げ「マウスツーマウス」で糞尿を吸っては吐き吸っては出し、救命しようとしたが、救えませんでした。赫は「誰が殺すと言った！」と号泣したそうです。残念ながら二人とも亡くなりました。管理所では病気で亡くなった人たちもいます。他にも処刑の恐怖などから精神的に病んだ戦犯たちもいました。

認罪と坦白

1954年4月のある日、元39師団232聯隊第1大隊の中隊長の宮崎弘が、管理所中庭に集まった戦犯全員の前で坦白（たんぱい・自己批判）しました。

「初年兵教育の教官だったとき、模範を示すため十数名を刺殺しました」と。

それだけではなく老人や子ども、妊婦を殺害し、村中を火の海にしたことを証言したのです。後は涙を流し「私は人間の皮をかぶった鬼でした。いまここに中国人民に心からお詫びをし、このうえは如何なる処罰も受け入れる覚悟です」と深々と頭を下げました。すると、それを聴いていた戦犯たちから「同感!」「その通り!」という声の中庭を埋め、大きなうねりになりました。宮崎の体験は彼だけの特別な体験ではなく、殆どの戦犯が身に覚えがあることでした。彼らは「処刑されるのでは?」と疑心暗鬼で怖くて過去の体験を吐露できなかったのです。

この宮崎の坦白の後、徐々に戦犯たちの認罪意識が進んでいったのです。しかし、そこには「お前がそんなことを言えば、俺の立場はどうなる」と喧々囂々の議論がありました。軍や行政機関等で位が高い人ほど認罪が遅れたと、自身が認めています。兵士は実行犯なので罪の意識がありますが、上官は命令するだけの人もおり、罪の認識が低いのです。部下から「貴方が指示したじゃないですか」と追及され、「そうか」と気付く人もいました。



【「起訴免除」決定の戦犯たち】

当初、彼らは加害や虐殺を隠していましたが良心に目覚め認めました。しかし、「それは上官からの命令だった」と、当初、自身の責任を認めませんでした。しかし、後に実行犯として責任があることを認め「いかなる処分も受け入れます」と認罪していきました。また上官もその指示した責任を認めるようになりました。この管理所の人道的待遇・教育を「嘘だ洗脳だ」という人たちがいますが、当時NHKが管理所を取材に訪れています。



【管理所を取材するNHK】

戦犯名簿の公開

まだ戦犯が収容されていた1954年11月、日本赤十字社の招聘で中国紅十字会が来日し、李徳全団長から「戦犯名簿」が初めて公表されました。

長い間、待っていた夫や息子たちの生存が、戦後9年目にして初めて確認されたのです。しかし、その時点で既に死亡届けを出されていたり、妻が弟と再婚していたなどというケースもありました。しかし、これは当時、中帰連に限ったことではありませんでした。

「鬼から人へ」

認罪が進むと部屋の鍵が外され、管理所内の移動が自由になり、図書室も完備し、映画会や文化祭も活発化しました。シベリアで体験したような強制では本心から人間は変わらず、彼らは寛大な人道的扱いの中で、自ら変わり「鬼から人に戻してもらった」と、管理所での6年に感謝していました。帰国後に「供述書は強制されたものだ」と公言したのは、「満州国」の元裁判官だった飯盛重任一人だけだと聞いています。

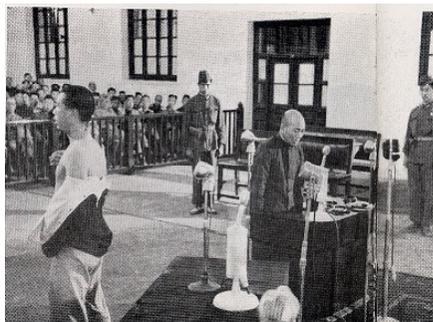
第4章 特別軍事法廷（1956年 瀋陽・太原）

特別軍事法廷

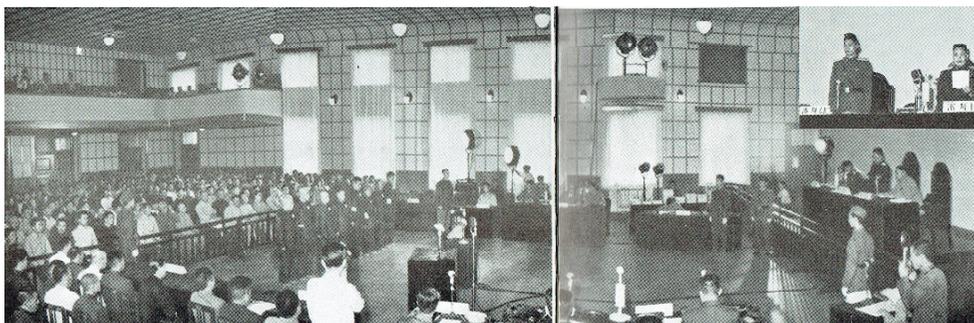
中国最高人民検察院は、現地や被害者を訪ね加害の裏付けを取っていましたが、決して自白を強要することはありませんでした。また被害の訴えは貨物列車2台分も提出されました。しかし必ず複数の証言がなければ取上げなかったといえます。1956年6、7月に4回に分けて45名の戦犯に対し、瀋陽（撫順組）と太原双方で特別軍事法廷が開かれました。

法廷には被害者や遺族が傍聴し証人としても参加し、自ら外傷を見せ加害を命令した被告たちを責めました。加害を命令した上官たちは事実を認め土下座までして詫び、赦しを乞う映像が残されています。判決は主に「満州国、政府関係、軍の将官、佐官級など45人（軍関係 8、満州政府関係 28、山西残留8、特務機関 1）だけでした。残りの1017名は「起訴免除」の決定を受け釈放されましたが、「まさか生きて帰れる」とは思ってはいなかったそうです。

しかし、法廷の傍聴席からは「そんなバカなことがあるか！」と抗議の声があり、裁判所は騒然となり混乱しました。そこで裁判長が木槌を叩くとやっと静かになり、裁判長は改めて「これは上級か



【証言する被害者と被告】



【特別軍事法廷】（1956年）

らの指示であり、死刑にはしてはならないのである！」と宣言したのです。

周恩来の指示

当初の判決原案には死刑や無期懲役もありましたが、それを周恩来が認めず判決原案を4回も書き直させました。その経過は下記を辿り、最終的に起訴されたのは45人だけで、禁固8～20年でした。しかも、シベリアの5年と管理所の6年の計11年が刑期に参入され、ほとんど刑期満了前に帰国を赦されたのです。

その理由は、彼らも「一部の軍国主義者の犠牲者」だという考え方からでした。偽「満州国」国務院総務長官、つまり実質的に「満州国」政府の最高権力者だった武部六蔵は、病気のため病室で禁固20年を言い渡されました。しかし、「病につき直ちに釈放する」と言い渡され、ベッドで号泣している写真があります。彼こそ「生きて帰れる」とは思っていなかったでしょう。彼は担架で興安丸に乗せられ帰国しました。他の起訴された戦犯も1964年4月7日までに全員帰国しました。

表① B・C級戦犯の国別人数

国名	裁判	死刑	無期	有期	無罪	其他	計
アメリカ	1945.11-1949.9	140	164	872	200	77	1453
イギリス	1946.12-1948.3	223	54	502	133	66	978
オーストラリア	1945.2-1951.4	153	38	455	269	24	939
オランダ	1946.8-1949.1	226	30	713	55	14	1038
中国 (国民政府)	1946.5-1949.1	149	83	272	350	29	883
フランス (サイゴン)	1946.2-1950.3	63	23	112	31	1	230
フィリピン	1947.8-1949.12	17	87	27	11	27	169
合計		971	479	2958	1049	238	5690
中華人民共和国	1956.6-7	無	無	45	1017 (有罪寛大奨励)	無	1062

『共和国特赦戦犯始末』任海生編著 華文出版社

- ①55年 9月 「起訴155人、死刑7人、執行猶予付き死刑3人」
- ②55年11月 「起訴155人、死刑なし」
- ③56年 2月 「起訴106人、無期懲役9人」
- ④56年 3月 「起訴51人、無期懲役なし、懲役20年4人」

【最高人民検察院「報告」・NHK-B Sハイビジョン特集 08.11.30】

帰国まで

起訴免除の決定書を受け取った戦犯がバスで管理所へ戻ると、「皆さんはもう戦犯ではありません」と、職員がみんなニコニコ顔で、次々に手を取り肩を抱いてまるで我がことのように「良かったね！あなたはもうすぐ家に帰れるんですね」と喜んでくれたのです。「我々はまた泣いた。顔をくしゃくしゃにして謝々謝々というだけで他の言葉にならない」と手記にあります。

管理所の中庭にはテーブルがいっぱいに置かれ、その上には中国料理とビールが並び、中庭は「大宴会場」に変わっていました。陽が落ちた中庭には電灯がともり、花まで飾ってあったのです。この中にも「生きて帰れる」と思っていなかった人たちが沢山いました。

帰国前の56年春には3組に分け、「国内参観旅行」をしています。第1、2組は判決前に約1ヶ月間、中国各地を案内され、戦時中バカにしていた中国の発展に目を見張り、「参観旅行」の感想記録も残しています。第3組は判決後で時間がなく、約1週間の参観でした。

帰国に際し入所時に管理所に預けた私物が返され、新しい服に靴や毛布、さらに現金50元まで支給され、それでお土産を買いました。そして天津（塘沽港）から管理所職員に見送られ、興安丸に乗って舞鶴に向けて出航したのです。彼らは管理所での人道的待遇の6年間に心から感謝しました。



【見送られ出航する「興安丸」】

第5章 「中国帰還者連絡会」結成と活動

舞鶴方針

彼らは1956年7、8、9月の3回に分れて舞鶴に帰国しました。既に帰国船・興安丸の船中と舞鶴宿泊所で「日中友好、特別手当の要求、恩給資格確保、太原組の軍人資格回復、生活支援と就職の斡旋」など5項目の「舞鶴方針」を確認していました。舞鶴では盛大な歓迎を受けましたが、そこには政府側の共産党に対する警戒の側面もありました。

帰国翌日、日本政府から彼らに支給されたのは引揚げ手当金1万円と時代錯誤の軍服と軍靴でした。彼らは「これでまた戦えというのか」と抗議し、引揚手当の1万円もあまりにも低額だと、更に1万円の上乗せを要求し獲得しました。これが帰国後、彼らの最初の権力への抵抗でした。

帰る家のない人は品川の引揚寮「常磐荘」に入居し、その後、第二次、三次組が帰国しました。しかし、帰国すると彼らには「アカ、洗脳者、中共帰り」などのレッテルが貼られ、公安警察に監視され就職が困難でした。

2000年の「女性国際戦犯法廷」で証言した金子安次は就職し、「後で履歴書を持ってきて」と言われ提出すると、「明日から来ないでくれ」と言われ、屑鉄商から帰国後の人生を始めました。また、同証言者の鈴木良雄も公安警察に監視され就職できず、牛乳配達から人生の再スタートを強いられました。当時はそのような人たちがいっぱいでした。

彼らはシベリアに5年、戦犯管理所に6年、その前の戦争体験と15年前後も日本を離れていたため、社会も価値観も大きく変わり、最後の中帰連事務局長だった高橋哲郎は「まるで浦島太郎だった」と語っていました。

中国帰還者連絡会結成

帰国翌年の1957年1月には、会報『前え前え』（ママ）第1号を発行し、同年9月に東京新宿の山楽会館で「第1回全国大会」を開き、代議員30人が参加し、国友俊太郎事務局長のもとに「中帰連」が正式に発足しました。（会長は空席）

当初、会の目的は生活の安定や経済的要求や、待遇改善などを求める互助会的な連絡機関でした。中帰連規約第二条には「本会は、中国より帰還した者が、親睦を深め、平和な生活を営むために、相互に援助し合い、合わせて日中両国の友好発展に貢献することを目的とする」とあります。



【「中帰連」結成第1回全国大会】

『三光』出版

彼らが管理所での体験を綴った手記を光文社（神吉晴夫）が入手し、中帰連も協力して『三光』（さんこう）が1957年に出版されました。このカッパブックスの『三光』は5万部を売り尽くしベストセラーになりましたが、右翼の妨害などで増刷されませんでした。

三光とは「焼き尽くし、殺し尽くし、奪い尽くす」を意味する中国側の表現です。「三光」という表現はこの本から拡がりました。後日『新編・三光』『完全版・三光』が新たに出版されています。また、この年には中国紅十字会から、彼らの管理所での生活を記録した貴重な写真集『人道と寛恕（かんじょ）』が全員に寄贈されました。



【「三光」初版本】

中国人殉難者遺骨返還事業と劉連仁

中帰連は立上げ早々の1957年、日本に強制連行・強制労働させられ、戦後に故国へ帰れずに亡くなった中国殉難者 329 柱の遺骨送還事業に、資金カンパを含めて他団体と協力しています。中帰連には中国の山東省でその強制連行に加わった人たちもいました。1957年12月には「中国紅十字会」の李徳全女史ら13人の訪日を受け入れています。

1958年には敗戦も知らず北海道で逃避行を続けていた強制連行・労働の被害者・劉連仁（りゅうれんじん）が発見され、中帰連は彼の帰国にも尽力しました。また、



【記録写真集】

60年の新安保条約の改訂反対運動にも取り組みました。61年には「会員名簿」を作り全員に配布しました。

中帰連分裂

1965年には藤田茂会長（元59師団長・中将）を代表とする「第一次訪中代表团」10名を送りました。しかし、その帰国後にベトナム反戦運動が優先か、補償要求が優先か、また中国共産党と日本共産党との対立、日中両国の友好協会による「日中共同声明」（1966年）の評価の違い、日中友好協会の分裂などの影響から中帰連も分裂してしまいました。共同声明を支持する藤田茂会長の「中帰連・正統」と、声明を支持しない小山一郎常任委員長とする「中帰連・中連」とに分裂し、20年間にわたりそれぞれの運動を展開しました。

この間、「正統」は東大紛争、沖縄反戦デー、砂川基地闘争などを支援し、参加しています。1978年には「正統」が第5次訪中団7名を派遣し、同行取材したRKB毎日放送の『戦犯たちの中国再訪の旅』（1978年）は、同年の日本民間放送連盟賞「最優秀賞」を受賞しました。また60年安保の国会デモで犠牲になった樺美智子の追悼集会にも参加しています。

また「中連」もベトナム・ソンミ事件の抗議集会や、NHKTVやTBSラジオに出演し、雑誌に加害体験を寄稿して「優秀賞」を受賞しています。1981年に「中連」は東京・山手教会での「平和のための戦争展」に会員多数が協力し、4300人の聴衆に証言しました。そして、1982年には『新編 三光』を発行しています。

中帰連再統一

1985年11月に両組織合同で「熱海合同懇親会」を開催し、翌86年3月「第7回統一促進委員会」が開かれ「統一大会準備委員会ニュース」第1号が発行されました。同年10月19、20日に熱海で「統一第1回全国大会」を開催、全国から91名が参加し正式に両組織は統一しました。代表委員に富永正三と大河原孝一、そして事務局長に山中盛之助が選出され再スタートしました。同年に「統一報告訪中団」8名を送りました。

一度分裂した組織が「再統一」することは希有なことであり、それぞれの主張はありましたが、管理所からの「和解・再統一」の勧めもありました。如何に中帰連がお互い譲歩し譲り合ったか、その思いを理解することができます。その後、2002年の解散まで力を合わせ努力し運動を続けました。



【「謝罪碑」（管理所）】

「向抗日殉難烈士謝罪碑」の建立

1988年10月には富永正三以下19名が訪中し、撫順戦犯管理所の中庭に建立した「向抗日殉難烈士謝罪碑」の除幕式に参加しています。

中帰連は長い間、管理所と交流を図り、管理所の訪日団を受け入れ、同時に撫順戦犯管理所はもちろん、同じ撫順の「平頂山惨案遺址記念館」やハルビン「731部隊罪証陳列館」、そして北京の「中国友誼促進会」などにたびたび訪れています。

季刊「中帰連」発刊

中帰連の証言を「自虐史観」と批判する右派グループが1996年「新しい教科書を作る会」を発足させました。中帰連は彼らへの反論のため97年6月、季刊『中帰連』を2000部発刊し、大きな反響を呼び増刷されました。創刊号（第一号）には家永三郎が「自由と真実の破壊とのたたかい」を寄稿し、藤岡信勝たちの危険な主張を強く批判しています。表紙は周恩来と藤田茂・初代「中帰連」会長です。不定期ながらも今も中帰連発行所が発行を継続し現在63号を数えています。中帰連は数多くの証言集や関連した本（自費出版を含め）を出しています。図書、映像など関連資料（一部）は巻末の「資料」をご参照下さい。



【『中帰連』創刊号】

第6章 「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」「NPO中帰連平和記念館」発足

中帰連解散

撫順戦犯管理所開設50周年の2000年、中帰連主催としての最後の訪中団は、賛助会員なども含め100人余りの大所帯となりました。この訪中の最後の晩餐会で参加者から中帰連解散が2002年に予定されているので、「中帰連の思いを受け継ぐ会を立ち上げたい」と提案され、晩餐会に参加していた中帰連会員や中国側の皆さんからは万雷の拍手が湧き起こりました。

「中帰連」は高齢化と会員数減少のため2002年4月20日、東京五反田の「ゆーぼーと」で解散式を迎えました。この解散式の直前に亡くなった富永正三富会長と、戦犯管理所最後の金源所長のお二人を「偲ぶ会」にもなりました。

解散式には全国から多くの中帰連会員が駆けつけ、賛助会員も数多く参加しました。式後の懇親会では皆さんの思い出話や今後の交流などに花が咲きました。



【中帰連「解散大会」】

中帰連会員の皆さんは、解散後も各地の「証言集会」で発言をしたり、戦犯管理所や平頂山惨案遺址記念館、731部隊罪証陳列館などを訪ねています。



【「撫順戦犯管理所開設50周年」の集合写真】

「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」発足

中帰連解散の翌2002年4月21日、東京五反田の「TOCビル」で中帰連の精神と活動を受け継ぐ「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の第1回設立総会が開催されました。

仁木ふみ子代表、熊谷伸一郎事務局長。会員350名。その後「北海道、岩手、埼玉、長野、千葉、東京、神奈川、湘南、岐阜、関西、山陰、九州」の12支部が次々と立ち上がりました。各支部はまだお元気だった中帰連の皆さんの聴取りや証言集会などを開き活動してきました。2005年には初代仁木ふみ子代表に代わり、姫田光義(中央大学名誉教授)が2代目代表に就任しました。各支部は地元平和団体などと協力し「平和展」などの運動を続けていますが、現在、運動を休止している支部もあります。



【「受け継ぐ会」設立総会】

『赦しの花』撫順の朝顔

「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」九州支部は佐賀市の副島進を訪ね体験の聴取りをしました。その話の中で彼が帰国する際に呉浩然指導員から「もう二度と武器を持って大陸に来ないで下さい。日本へ帰ったら、幸せな家庭を築いてください」と朝顔の種を渡されました。彼がその朝顔を帰国後、毎年咲かせている話しに感動し、2006年に九州支部長が『赦しの花』の絵本を作りました。その絵本が話題になり新聞各紙や、米紙『ヘラルド・トリビューン』にまで報道され、大きな話題になりました。この「赦しの花」はいま全国の仲間が咲かせています。



【絵本『赦しの花』】

国内謝罪碑建立

「中帰連」千葉支部は1997年に千葉県匝瑳市の妙福寺境内に『中帰連碑』（謝罪碑）を建立しています。「受け継ぐ会」と「記念館」の共催で、毎年、境内の藤の花の咲く頃の5月5日に「観藤会」と称して、この謝罪碑の前に集い、中帰連を偲び彼らの思いを新たにしている場としています。



【「観藤会」毎年5月5日】

「NPO中帰連平和記念館」の設立

中帰連の皆さんが亡くなると、ご遺族が彼らの持つ資料を処分されてしまう状況が一部起きていました。「家には子どもも孫もあり、加害や虐殺など自慢にもならない不都合なことを話して欲しくない」というのが多くのご遺族の本音であり、私たちにそれを責める資格はありません。

しかし、私たちは戦争体験者ではないため、彼らの残してくれた資料を使い、後世に伝えるしか方法がありません。そこで、彼らの貴重な資料の散逸を防ぐため収集活動を開始しました。

2006年11月3日に初代仁木ふみ子理事長（2012年逝去、元日教組本部婦人部長）の下に、現在地の川越市笠幡に「中帰連平和記念館」をNPO法人として立ち上げました。2011年には仁木理事長の要請を受けて、2代目の松村高夫理事長（慶応大学名誉教授）が就任しました。現在、13名の理事と2名の監事で年4回理事会を開き、事務局を置き、全員ボランティアで活動しています。

記念館の設立前に、初代仁木ふみ子理事長宅にまず中帰連関係資料を集めました。入り切らなくなった資料は、近くの中古農業倉庫の一部を借りて搬入しました。その後、資料が増え続けその倉庫を買うことになり、札幌市在住の大河原孝一・元中帰連副会長が、全国の元中帰連の皆さんにカンパを呼びかけ土地と共に買ってくださったのです。

この場所があるからこそ、家賃も払わず立ち退きの心配もなく、安心して運動が続けられています。

記念館には約5万冊の寄贈図書の外、新井利男の収集した写真・録音資料や数多くの映像資料が保管されています。市民のみならず、ジャーナリストや研究者などにも資料を提供しています。



【「NPO中帰連平和記念館」開館】

平和記念館の活動

2016年11月に「ウェスタ川越」で開館10周年集会を開き、200人余りの人が参加下さいました。記念館には多くの市民や団体、内外のジャーナリストや学者も来館しています。メディアでは朝日、毎日、東京新聞、中国中央TV、香港フェニックスTVなどが来館し、国内の学者の他にドイツ、米国、オーストラリアの学者・研究者などが平和研究のため来館し、英語やドイツ語の本で中帰連を紹介しています。

記念館も協力しNHK-B Sで再々放送（2008年）された『“認罪”中国撫順戦犯管理所の6年』はギャラクシー大賞や放送文化賞を受賞しました。エンドロールには「NPO中帰連平和記念館」の名が入っています。

中帰連平和記念館は「ひめゆり平和祈念資料館、丸木美術館、ピースあいち、山梨平和ミュージアム、満蒙開拓平和記念館・・・」など、多くが参加している「平和のための博物館市民ネットワーク」や、「戦争遺跡保存ネット」にも参加しています。また3年に1回世界各地で開催される「国際平和博物館会議」にも参加しています。この事務局はオランダハーグから2018年に「立命館国際平和ミュージアム」に移転しました。

多くのボランティアの方に資料整理をして頂き、「研究会」なども開き、年数回「中帰連に学ぶ会」の学習会なども開いています。



【「認罪」NHK-B S】



【記念館「閲覧室」】

「再生の大地合唱団」の立ち上げ

「再生の大地合唱団」（団長・姫田光義）は撫順戦犯管理所での魂の出会いをもっと多くの人に伝えたいと、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の学習会に参加したり、中帰連の皆さんの話を聴くなどの企画を立てて、合唱団を立ち上げる準備をしました。作詞は大門高子が学習を積み上げて合唱朗読構成「再生の大地」を創作し、作曲は安藤由布樹が毎月一曲づつを仕上げて行きました。合唱団が立ちあがると同時に、東京墨田区のユートリアホールでの抜粋の演奏や、中野ゼロホールでの「ジエームス三木と合唱の夕べ」では、日中友好協会東京都連主催の70名による全曲演奏初演は650名の会場を満杯にして大きな反響を呼びました。

この後、混声二部だった曲を混声四部にして、浅草蔵前のヨハネ教会と神楽坂の箏箏地域センターでのレッスンを重ね、日中友好を歌う貴重な合唱団として活動を始めて来年10周年を迎えます。

団は様々なところから声をかけられて演奏を積み重ね 撫順戦犯管理所の存在を知ってもらう良い機会になっています。国内はもとより中国大使館や中国の撫順も訪れて管理所の舞台や講堂、瀋陽の裁判所遺跡、東北大学、さらに北京の国際放送局などでも歌い、中国の皆さんにも感動を持って聴いてもらっています。国内でも平和コンサートや撫順の高校生が来日したときの歓迎演奏や華僑の合唱団との合同演奏に積極的に演奏をしたり交流をしてきています。

中帰連の精神と活動を後世に伝える活動の一貫としても歌われ、その中には戦犯たちが管理所で作った「蒙古踊り」があり、当時の管理所での雰囲気伝えていきます。中国の寛大政策に感謝しつつ「反戦平和と日中友好」のために戦い続けた中帰連を讃えることも大事にしたいと活動を続けています。



【「北京公演」2015年】

あとがき

中国はアジア太平洋戦争の最大の被害国であり、その犠牲者は日本人310万人の3倍を越え1000万人以上とも言われています。しかも、その殆どは一般市民（5頁参照）でした。それにも関わらず中国は「賠償請求権」を放棄し、戦犯を一人も処刑しなかったことを、どれだけの日本人が知っているでしょうか。

私たちは、日本人戦犯を赦し、「信頼関係を築き平和を維持したい」という周恩来の思いに深く敬意を表します。これからもこの赦された歴史を後世に伝え、権力に抗う中帰連の諸先輩の精神を受け継いでいきたいと思えます。そのさい私たちは、加害国であったその一員として、筆舌に尽くしがたい被害を受けた中国人などアジアの人びとが本当にここから赦してくれるような思想と行動をしてきたらどうかと、自らに絶えず問うことを止めてはならないと思っています。

（本文中、敬称略）

2019年10月26日

文責 NPO中帰連平和記念館事務局長 芹沢昇雄

【資料】

◆「中帰連」年表（「○」印は月）

- 1956 ⑦⑧⑨3回に分け「興安丸」で舞鶴に帰国（一次335名、二次328名、三次354名）計1017名（受刑者44名を除く）
⑩「中国戦犯帰国記念文化公演」開催（東京千代田区公会堂）
- 1957 ①機関紙「前え前え」第1号発行
③戦争記録体験記「三光」を光文社より出版 ベストセラーとなる
①第7次中国殉難烈士遺骨送還奉持団で国友俊太郎事務局長が訪中
⑨第1回全国大会 中帰連結成
⑫「中国紅十字会訪日代表团」（団長・李徳全女史）歓迎
- 1958 ③強制連行された中国人・劉連仁氏の支援の会を組織し援助する
⑤「日中関係緊急事態打開国民大会」に参加
⑧「侵略—中国における日本戦犯の告白」新読書社より出版
- 1959 ②冊子「日米安保条約改定の狙いはどこにあるか」発表
④安保反対第1次統一行動に参加
⑪安保阻止第8次統一行動国会請願デモに参加
- 1960 ⑥自民党単独可決「新安保」に抗議する全国統一行動に参加
⑩第2回全国大会（藤田茂会長就任）
- 1961 ⑪「日中国交回復実現・中国の国連代表権要求全国統一行動中央集会」に参加
- 1962 ⑦「七・七25周年記念日中国交回復要求集会」を開催
- 1963 ⑪「中国人殉難烈士大慰霊祭」（九段会館）で藤田会長が追悼の辞
⑫「中国紅十字訪日代表团」（団長：侃崧君）歓迎交歓会開催
- 1965 ⑨「第1次訪中代表团」派遣
- 1966 ④「中国人民対外文学会訪日代表团」の入国を妨害する政府への抗議行動に参加
- 1967 ②中帰連が「正統」と「中連」に分裂
- 1969 ④沖縄デー中央集会に参加
⑥砂川基地闘争現地集会に参加
⑥反戦反帝闘争の殉難者樺美智子さんの追悼集会に参加
⑫米軍のベトナム・ソンミ事件に対する東京抗議集会に参加
- 1974 ⑧月刊誌「現代の眼」に連載の座談会記録「天皇の軍隊」を出版
- 1976 ②「周恩来総理国民追悼会」に参列
⑩「毛沢東主席国民追悼会」に藤田会長以下18名が参列
- 1977 ⑦「七・七40周年記念集会」（YMCA）を友好団体と共催
- 1978 ⑦R K B毎日テレビ「戦犯たちの中国再訪の旅」録画撮りに協力
⑫上記番組が「昭和54年度日本民間放送連盟賞番組コンクール優秀賞」

- 1981 ②「戦争体験を聞く会」(広島市)でスライド「日本は中国で何をしたか」の上映及び証言
 ⑧「平和のための戦争展」(東京)に会員多数が参加し、戦争体験を証言
- 1982 ⑧「新編三光」第1集発行
 ⑧教科書問題に対する緊急抗議集会に参加、文部大臣に抗議
- 1984 ⑩「中国撫順・太原元管理所職員代表訪日団」(団長・金源)歓迎
- 1985 ⑥「金鵝勲章復活反対抗議集会」を開催、声明文を内閣官房に手交
- 1986 ⑩分裂していた組織が19年ぶりに統一
- 1988 ④「中帰連桜花飯店開店祝賀代表団」を撫順に派遣
 ⑩「向抗日殉難烈士謝罪碑」を撫順に建立、除幕式参加訪中団派遣
- 1989 ②「天皇の国葬を許さない2・23集会」に参加
 ⑧NHK「戦犯たちの告白－撫順・太原戦犯管理所1062人の手記」出演
- 1990 ⑧日本テレビ「ある戦犯の謝罪－土屋元憲兵少尉と中国」に出演
 ⑩「自衛隊の海外派兵の動きに対する抗議文」を海部総理・衆参議院議長他各政党マスコミ各社に郵送
- 1991 ①「自衛隊海外派遣に反対する抗議文」を海部総理はじめ各政党・マスコミ・友誼団体に郵送
 ⑪「戦争協力法反対緊急街頭リレー演説会」に参加、富永会長演説
 ⑫「真珠湾攻撃50周年記念集会」を5団体と共催し「PKO法案に断固反対する声明」を発表
- 1992 ⑤「海外派兵三法案廃棄を目指す5・14共同行動」共催、集会、デモ
 ⑦「STOP!海外派兵」に参加、デモ行進
- 1993 ②「PKO反対のための2・15要請行動」他団体と共に、外務省に要請
 ④「自衛隊をすぐかえせ!4・29市民行動」会長演説
 ⑦「731部隊展」に全面協力。各地の会場で多数の会員が証言
 ⑧TBSラジオの深夜放送「若者に戦争を知らせたい」に出演
 ⑧張惠民烈士の遺族より依頼された「日本政府に対する戦争被害の賠償を要求する文書」に、趣意書を付して、細川総理と羽田外務大臣に提出
- 1994 ③「戦没者追悼平和祈念館鍬入れに抗議する集会」に参加
 ⑦「中国人強制連行殉難者合同追悼集会」(東京築地本願寺)に参加
- 1995 ⑨「戦後50年記念集会」を友好3団体と共に開催
- 1996 ④「帰国40周年記念式典」を開催
 「帰ってきた戦犯たちの後半生－中国帰還者連絡会の40年」を出版
- 1997 ⑥季刊「中帰連」発行
- 2000 ⑨「中帰連」最後の訪中
- 2002 ④「中帰連」解散
 ④「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」発足
- 2006 ⑪「NPO中帰連平和記念館」設立

◆図書資料

書名	著者	出版社
三光（初版本）（1957）	神吉晴夫	光文社
侵略 中国における日本戦犯の告白（1958）	中帰連	新読書社
望郷 元満州国裁判官の抑留受刑記（1973）	中帰連・横山光彦	サイマル出版会
中国から帰った戦犯（1975）	中帰連・島村三郎	日中出版
あるB・C級戦犯の戦後史 ほんとうの戦争責任とは何か（1977）	中帰連・富永正三	水曜社
処刑されなかった戦犯（1979）	中帰連・小川仁夫	日中出版
撫順戦犯管理所 千人の日本人に何が起きたか（1987）	中帰連	自費出版
私たちは中国で何をしたか（1987）	中帰連	三一書房
天皇の軍隊「中国侵略」 －日本人戦犯の手記から（1988）	中帰連	日本機関紙センター
菊と日本刀（上・下）（1985）	中帰連・鶴野晋太郎	谷沢書房
侵略・虐殺を忘れない 天皇の軍隊「日本人戦犯の手記」（1989）	中帰連	日本機関紙センター
侵略 体験と反省の記録（1990）	中帰連	自費出版
聞き書き ある憲兵の記録（1985）	中帰連・土屋芳雄	朝日新聞社
千人の戦鬼（1984）	中帰連・江先光	叢文社
私たちは中国で何をしたか（1995）	中帰連	新風書房
侵略の証言（1999）	新井利男・藤原彰編	岩波書店
白狼の爪跡 山西残留秘史（1959）	中帰連・永富博道	新風書房
「三光作戦」とは何だったか（1995）	姫田光義	岩波書店
帰ってきた戦犯たちの後半生 中国帰還者連絡会の40年（1996）	中帰連	新風書房
消せない記憶 日本軍の生体解剖の記録（1996）	中帰連・湯浅謙	日中出版
撫順の空へ還った三尾さん（1999）	小林節子	杉並けやき出版
洗脳の人生（1999）	中帰連・国友俊太郎	風濤社
絵草紙 日中戦争（1999）	中帰連・江先光	叢文社
認罪の旅～七三一部隊と三尾豊の記録（2000）	刊行委員会	自費出版
私と戦争と（2011）	中帰連・鹿田正夫	自費出版
私たちが中国でしたこと 中国帰還者連絡会の人びと（2002）	星 徹	緑風出版
転落と再生の軌跡 中国戦犯は如何に生きてきたか（2003）	中帰連・広島岡山支部	自費出版
日本にも戦争があった 731部隊元少年隊員の告白（2004）	中帰連・篠塚良雄	新日本出版
鬼から人間へ（2007）	中帰連・小山一郎	自費出版
あなたは「三光作戦」を知っていますか（2007）	中帰連・坂倉清	新日本出版
生きている戦犯～ 反動分子と呼ばれた元将校の体験（2007）	中帰連・金井貞直	自費出版
激動の昭和を生きて～私の自分史（2012）	中帰連・中村賢一	受け継ぐ会千葉支部
安井 清（2012）	中帰連・坂倉清	自費出版
残してきた風景～ 私たちが湖北省で犯したこと（2013）	山陰中帰連	あさがおの会
支部報でみる山陰中連50年の歩み（2013）	難波靖直編	山陰中帰連
私の駆け足反省 中国での従軍と帰国後の日々（2015）	藤原恒男	あさがおの会
父の遺言（2016）	伊東秀子	花伝社
皇軍兵士、シベリア抑留、 撫順戦犯管理所（2017）	中帰連・絵嶋毅	花伝社

◆映像資料

タイトル(時間)	制作・放送日
『戦犯たちの告白』 (45分)	1989. 8. 15 NHKスペシャル・終戦特番
『認罪～中国・撫順戦犯管理所の6年』 (110分)	2008. 11. 30 NHK (ギャラクシー大賞)
『日本人中国抑留の記録』 ①② (各45分)	1999. 12. 6-7 NHK「ETV特集」
『ある戦犯の謝罪～ 土屋元憲兵少尉と中国』 (35分)	1990年 山形放送
『中国人殉難烈士遺骨発掘の旅』 (30分)	1965年 NHK「新日本紀行」
『兵士たちが語ったこと』 (52分)	2001. 9. 1 フジTV
『戦犯たちの中国再訪の旅』 (50分)	1978年 毎日放送 (日本民間連盟「優秀賞」)
『拓け満州』 (30分)	TBS・TV
『満蒙開拓団はこうして送られた 眠っていた元関東軍将校の資料』 (50分)	NHKスペシャル
『真相消えた女たちの村 あの時日本人開拓村に何が起こったのか?』 (90分)	TV朝日
『忘れられた女たち中国残留婦人の昭和』 (60分)	NHKスペシャル
『記憶の澱』 (80分)	2018. 11. 20 日本TV (制作: 山口放送) (日本放送文化大賞・グランプリ受賞)
『証言～侵略戦争 ～人間から鬼へそして人間へ』 (42分)	日中友好協会
『南京事件～兵士たちの遺言』 (46分)	2018. 5. 4 NNNドキュメント
『人道と寛恕』 (114分)	中国・撫順戦犯管理所
『引き揚げはこうして実現した』 (50分)	2008. 12. 8 NHKスペシャル
『フィルムは見ていた検証・南京大虐殺』 (52分)	2091. 10. 6 毎日放送
『命をかけた日中友好・岡山寄嘉平太』 (60分)	2007. 3. 19 NHKスペシャル
『平頂山で何が起きたのか?』 (30分)	中国人戦争被害者の要求を支える会
『私たちの戦争・慰安婦にされた女たち』 (113分)	東京賢治の学校
『関東大震災の中国人虐殺』 (28分)	日本電波二ユース
『戦争孤児～埋もれてきた戦後史を追う』 (100分)	2018. 12. 24 NHK-B S
『船乗りたちの戦争～海に消えた6万人の命』 (45分)	2018. 8. 13 NHKスペシャル
『教えられなかった戦争・中国編』 (98分)	映像文化協会
『教えられなかった戦争・沖縄戦』 (110分)	映像文化協会
『太陽がほしい～「慰安婦」とよばれた 中国人女性たちの人生の記録』 (120分)	監督: 班忠義
『葫蘆島大遣返』 (96分)	葫蘆島を記録する会
『望郷の鐘・満蒙開拓団の落日』 (104分)	監督: 山田火砂子
『日本鬼子』(リーベンクイズ) (160分)	監督: 松井稔
『泥にまみれた靴で、 未来へつなぐ 証言侵略戦争』 (26分)	2007年 日中友好協会
『三尾豊さんインタビュー』 (105分)	1996. 12月 TV朝日
『中国帰還者の60年』 (10分)	2005. 7. 27 TBS「ニュース23」
『満蒙開拓団はこうして送られた』 (50分)	2006. 8. 11 NHKスペシャル
『レーン・宮澤事件、もう一つの12月8日』 (52分)	ビデオプレス
『フィルムは見ていた検証・南京大虐殺』 (52分)	1991. 10. 6 毎日放送
『村人はこうして満州へ送られた～ “国策” 71年目の真実』 (50分)	2016. 8. 14 NHKスペシャル
『刻印～不都合な史実を語り継ぐ』 (52分)	2015. 9. 27 NHK-B S (制作: 信越放送) (日本民間放送連盟賞・最優秀賞)

資料

◆『向抗日殉難烈士謝罪碑』（撫順戦犯管理所）

私たちは十五年に及び日本軍国主義の対中国侵略戦争に参加、焼く・殺す・奪う滔天の罪行を犯し、敗戦後撫順と太原の戦犯管理所に拘禁されました。そこで中国共産党と政府・人民の「罪を憎んで人を憎まず」という革命的人道主義の処遇を受け、初めて人間の良心を取戻し、計らずも寛大政策により、一名の処刑者もなく帰国を許されました。

いま撫順戦犯管理所の復元に当り、此の地に碑を建て、抗日殉難烈士に限りなき謝罪の誠を捧げ、再び侵略戦争を許さぬ、平和と日中友好の誓いを刻みました。

一九八八年 十月二十日

中国帰還者連絡会

◆『中帰連碑』（千葉県匝瑳市「妙福寺」）

第二次世界大戦の戦犯として中国に抑留された私たち一、一〇九名うち千葉県五五名は中国政府の思いもよらぬ寛大な処遇を受け、一人も処刑されることなく一九五六年以降釈放され全員帰国を許されました。私達が侵略者として中国で犯した滔天の罪行は被害者の心情を思えば思うほど、深くしてなを重くとも償えるものではありません。

私達は過去への反省を込め帰国後中国帰還者連絡会をつくり恒久平和を希求し、反戦と日中友好に努めて参りました。帰国四十年に当たり、今ある我が身を想い『怨みに報ゆるに徳を以てす』の偉大なる中国人民に対し限りない感謝と謝罪の誠を捧げ、亡き先達の遺族と共に此の地に碑を建立し永遠なる日中友好の誓いとします。

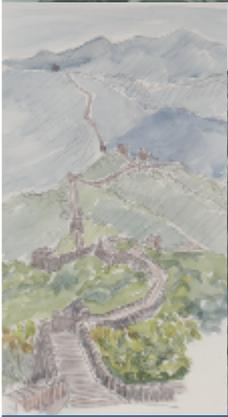
一九九七年七月吉日

中国帰還者連絡会千葉県支部

◆『荒れ野の40年』（敗戦40周年・ヴァイツゼッカー元大統領演説）

罪の有無、老若男女いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。全員が過去からの帰結にかかわりあっており、過去の責任を負わされているのであります。心に刻みつけることがなぜかくも重要であるかを理解するため、老幼互いに助け合わねばなりません。

問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけがありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります（拍手）。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。（一部）



発行 2019年10月26日 NPO中帰連平和記念館 理事長・松村高夫
 〒350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6 E-mail: npo-kinenkan@nifty.com
 TEL&FAX: 049-236-4711 HP: <http://npo-chuukiren.jimdo.com/>
 振込口座: 00150-6-315918 開館日: 「水、土、日」(10:30~16:30)
 口座名: 特定非営利活動法人 中帰連平和記念館 (来館は事前にご連絡下さい) ¥500

